



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3529 号 2017.2.25 発行

<いのちの響き> 18歳の門出を前に (上) 心配よそにゆっくり成長



東京新聞 2017年2月23日
 昼食近くなってそわそわする太田励夢さん(右)に、手話交じりで「いすに座って」と話し掛ける真美さん=津市の障害者施設「びーす」で

二月十八日のお昼前、津市の障害者施設びーす。「もうすぐ、楽しみのご飯やなあ」。代表の太田真美さん(44)が話しながら、右手の人さし指と中指を口元で上下させた。ご飯を意味する手話だ。笑顔に向けた先には長男の励夢(れん)さん(18)がいる。

身長一八二センチの励夢さんは、食べるのが大好き。他の十人の子どもたちが静かに絵本を読んだり、職員とじゃれ合ったりする中、間もなく始まる昼食が気になって、立ったり座ったりして台所をのぞき込む。

この日のおかずは、鶏肉のから揚げと春巻き。急いで食べてむせないように、細かくしてある。食べ始めて五分余り。励夢さんのおわんはもう空っぽだ。「この子の食事はいつも一瞬なんです」。太田さんはほほ笑む。

順調に育っていると思われていた励夢さんだが、全く耳が聞こえないと分かったのは二歳の時。名を呼ぶと振り返ったこともあり、それまで気付かれなかった。ろう学校の乳幼児教室に週に一回通い始めると、今度は泣き叫んでその場にいることが難しかった。知的障害を伴う自閉症とも診断された。

「これはテレビドラマか、何かやろ」。太田さんは事実を直視できなかった。食事はのどを通らず、夜は眠れない。知人にも相談できず、その代わりに詩にしたためた。「何故(なぜ) 息子の聴力を奪ったのですか 何故 自閉症という障害まで持たせたのですか」

そんな親の心配をよそに、励夢さんはゆっくりと成長した。

物心が付くころになると、家から外に出たがった。太田さんのバッグを持つのが、「外に行きたい」という意思の表れ。太田さんは励夢さんと一歳下の妹を、公園やスーパーなど、どこにでも連れて行った。でもすぐに帰りたがるため、公園のはしごが日課になった。

六歳で入学したろう学校では、担任の男性教諭が粘り強くコミュニケーションの仕方を教えてくれた。一年生の終わりごろには、おじぎをして「さようなら」、胸の前で両手をたたいて「ちようだい」ができるようになった。初めて獲得した“言葉”に、家族みんなで喜んだ。

そのうち、家族四人で行くファミリーレストランが大好きに。ハンバーグが好物で、ファミレスに来たうれしさから、つい大きな声を出してしまうことがある。周囲の客は驚いて、こちらをうかがう視線を投げかけるが、「元気のいい子ですね」と声を掛けてくる女性店員の言葉に勇気をもらった。

中学からは特別支援学校に通学している。疲れが出てくる週の半ば以降は、学校のカバンを押し入れに隠して、行きたくないと自己主張。太田さんが支援学校のバス停まで、涙目の励夢さんを引っ張っていく。でもバスが来ると、けろっとした表情で乗り込むのだ。「性格は素直。ほんとにかわいい」と太田さん。

両親はこれまで、励夢さんが自分自身で身の回りのことをできるようになってほしいと願ってきた。日々の繰り返しで、食事とトイレは可能に。風呂は、体の洗い残しがまだ出てしまうので少し手を貸す。すべての服の右側にボタンを縫い付け、表裏と前後が分かるようにしてあり、服を着られるよう練習中だ。（諏訪慧）

＜いのちの響き＞18歳の門出を前に（下） 「親離れ」選択複雑な思い

東京新聞 2017年2月24日

金属の輪の向きをそろえる作業をする太田励夢さん（右）と真美さん＝津市の障害者施設「ぴーす」で



津市の障害者施設ぴーす。二月のある日、特別支援学校高等部の卒業を翌月に控えた太田励夢（れん）さん（18）が、シャボン玉の容器を手に軽作業をする部屋に入ってきた。

冬でもトレードマークのTシャツを身に着け、手にはお気に入りの赤い容器。「早く吹きたいよ」と言いたげな表情に、ぴーす代表で母親の真美さん（44）が笑いながら手話交じりに話し掛けた。「あれを先にやってからね」

「あれ」とは、直径十センチの金属の輪の表裏をそろえる軽作業だ。市内の町工場からぴーすが請け負っている。

生まれつき耳が聞こえず、重い知的障害を伴う自閉症の励夢さん。他の利用者と一緒に作業し始めたが、五分後には我慢しきれずシャボン玉を吹き始めた。ストローの先端にできたシャボン玉を大きくしたり小さくしたり。微妙な息の吹き具合による変化を楽しんでいる。

卒業式は三月七日。その日を境に、中学部と高等部の計六年間通った学びやを離れる。学校では、担任や保護者、卒業後に通う施設の職員らとの面談が始まるなど、旅立ちへ向けた準備がすでに本格化。励夢さんは、いつもと違う校内の雰囲気を感じて、そわそわしだした。

真美さんは、夫とともに式に臨席する予定。「つらかったことや、うれしかったことが思い出されて、涙をこらえられなくなるかも」。その週末には、家族四人で温泉旅行に出掛けて、励夢さんの門出を祝うつもりだ。

高等部を卒業すると、障害が比較的軽い場合は一般就労への道が開けるが、励夢さんには難しいという。式の翌日から通うことを決めたのは田畑に囲まれた社会福祉法人の運営施設。周囲の交通量が少なく危険性がなく散歩をよくすると聞いたから。

「卒業すると体育の授業がなくなって、運動する機会が減る。励夢は食べるのが大好きで太りがちだから、合っていると思う」。太田さんが代表を務める「ぴーす」には通わない。

ぴーす開設は、励夢さんの卒業後の居場所確保が、念頭にあった。ところが二〇一五年七月に開設してみると、励夢さんは学校でできる作業が、ぴーすではできない。そのうち、「私や顔見知りの職員がいるから、甘えちゃうと分かった」。

真美さんが想定しているのは、「自分たち夫婦が死んだ後のこと」だ。励夢さんは一人暮らしが難しいので、施設で暮らす必要が出てくるかもしれない。「その時に身の回りのことをできる限りやれるようになっていには、今は私が近くにいない方がいい」

真美さんは、励夢さんや施設に通う子どもたちと接するなかで、障害のある人との関わ

り方を模索していった。「子どもに障害がなかったら、考えを巡らすことすらなかったと思う」

昨年十二月、真美さんが作詞し、ピアノを習っていた高校二年生の長女（17）が作曲と歌を担当して、「ヒーロー」と題した歌を作り、動画投稿サイト「ユーチューブ」に「Ry Ren」の名で投稿した。

みんなのヒーローじゃなくてもあなたは私のヒーロー。家族で訪れたファミリーレストランで冷たい視線を感じたことなど実際のエピソードを、歌詞に盛り込んだ。今月上旬には二曲目も投稿。「障害のある人に目を向けてもらうきっかけになれば」と願っている。（諏訪慧）

「カモリスト」を逆利用 悪徳商法被害防止に新たな手法 毛利光輝

朝日新聞 2017年2月23日

消費者庁は、悪質な訪問販売や電話勧誘を行っていた業者が利用していた顧客名簿の情報を、滋賀県野洲市に全国で初めて提供した。野洲市は4月から、名簿に載っていた高齢者らを地域で重点的に見守り、悪質商法の被害を防ぐ取り組みを始める。

消費者庁が特定商取引法に基づく調査で業者から入手した名簿で、過去に被害に遭った高齢者らの名前や住所などが記されている。こうした名簿は「カモリスト」と呼ばれ、業者間で出回っている。

これまで個人情報保護の関連法で国は自治体に原則、名簿情報を提供できなかった。そこで消費者安全法を改正し、昨年4月から高齢者らの見守り態勢を整えた自治体に対し、本人の同意なしに情報を提供できるようにした。

具体的には市町村などが消費生活センター、社会福祉協議会、警察、介護サービス事業者など官民による協議会を設け、国に情報提供を要請。協議会はその情報をもとに、見守り対象者のリストをつくり、ヘルパーらが自宅訪問した時などに様子を見る。個人情報保護の観点から、関係者には秘密保持義務があり、違反した場合、1年以下の懲役または50万円以下の罰金となる。



相模原殺傷、元職員の男を起訴 殺人罪などで横浜地検

日本経済新聞 2017年2月24日

相模原市の障害者施設で入所者19人が刺殺された事件で、横浜地検は24日、元職員の植松聖容疑者（27）を殺人や殺人未遂などの罪で起訴した。

戦後最悪の死者数を出した殺人事件は今後、裁判員裁判で審理される。法廷で事件の経緯や詳しい動機などがどこまで明らかになるかが焦点となる。

起訴状によると、植松被告は昨年7月26日未明、相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」に侵入し、入所者の男女43人を持ち込んだ柳刃包丁で刺すなどして19人を殺害、24人に全治9日～6カ月のけがを負わせた。また、職員5人を結束バンドで縛り、うち2人にけがをさせたとされる。

横浜地検は5カ月にわって植松被告を鑑定留置し、事件に至る経緯や当時の精神状態を調べていた。専門医らの精神鑑定を経て、刑事責任能力があると判断した。

【相模原殺傷】「当然だ」「幸せか問いたい」被害者の家族反応

産経新聞 2017年2月24日

元職員の植松聖被告の起訴を受け、津久井やまゆり園の入所者家族からは「当然だ」などとする声が上がった。

『「あなたは今幸せですか？」と問いたい」。植松被告に腹などを刺され一時意識不明の重傷となった入所者、尾野一矢さん（43）の父の剛志さん（73）は、深いため息とともにそう話す。

現在、一矢さんは神奈川県厚木市内の施設で生活。剛志さんは、妻のチキ子さん（75）と毎週水曜日にこの施設などで一矢さんと昼食をともにする。事件をきっかけに家族の絆が深まったといい、チキ子さんは「凄惨な事件だったが、家族の大切さを再認識できたことだけは良かった」。

「障害者は不幸しか作らない」などと一貫して主張しているとされる植松被告。剛志さんは「起訴は当然のこと。法廷で彼に『罪のない人の命を奪って、本当に幸せですか』と聞きたい」と話した。

【見解】「人権」置き去りの大国と ワシントン支局・山崎健

西日本新聞 2017年02月24日

◆米国勤務を終えて

「白人を皆殺しにする」。そう心に決め、身の回りの銃を全てかき集めて故郷ミシシッピ州に向かった。2013年8月、ワシントン支局に着任して最初に書いた記事の取材で会ったチャールズ・エバースさん（94）の回想だ。

公民権運動の指導者キング牧師が1963年8月、「私には夢がある」という歴史的演説を行ってから50年。それは、ミシシッピで運動をけん引したチャールズさんの弟、メドガー・エバースさんが白人至上主義の男に射殺されて半世紀の節目でもあった。

復讐（ふくしゅう）に走らず、弟の遺志を継ぎ公民権運動のリーダーとなったチャールズさん。しかし、彼が語った憎悪と同じ感情は今も米国内に渦巻く。

近年も白人警官による黒人殺害が各地で相次ぎ、抗議活動がたびたび暴動にまで発展。そしてトランプ大統領の誕生で、自分と異なる肌の色に対する負の感情が国内でさらに増殖しているように思う。白人優越主義者たちが闊歩（かっぽ）。学校現場でも白人の学生や子どもによるヒスパニック（中南米系）の移民や黒人への差別事件が頻発。逆に4人の若い黒人が、白人の知的障害者に集団暴行を加える事件も今年に入って起きた。

「黒い肌、褐色の肌、白い肌、誰であろうと同じ愛国心の赤い血が流れている」。トランプ氏は1月の就任演説で国民に団結を呼びかけた。だが直後に出した排外主義的な複数の大統領令は「人権軽視」のトランプ氏の本質を、あらためて浮き彫りにした。

そのトランプ氏と安倍晋三首相との初の首脳会談が先日、ワシントンで行われた。今月末に帰国する私にとって実質上、最後の仕事。首相は終始、トランプ氏の顔色をうかがっている印象だった。「こんなに大統領におべっかを使う外国の首脳は見たことがない」。ある米アナリストはツイッターにこう投稿した。

一昨年秋、首相の祖父、岸信介元首相と米国との関係を記事にした時、「米国から独立するために従属するというのが、皮肉にも岸氏の対米戦略だった」と識者が指摘していた。トランプ政権下、日米関係はどこに向かうのか。人権尊重という最も大事な価値観を共有することもなく、首相は対米追従色だけを濃くしていく。そんなことにはならないように願っている。

不登校の小中生に、貝塚市がホースセラピー事業

読売新聞 2017年02月24日

貝塚市がホースセラピーに活用する乗馬クラブの屋内馬場（貝塚市地蔵堂で）



大阪府貝塚市は4月から、不登校の小中学生たちを対象にした「ホースセラピー事業」に乗り出す。

馬への餌やりや乗馬など、馬との触れ合いを通じて心身を癒やし、学校復帰につなげてもらう狙い。市内の乗馬クラブの協力を得て、学校授業の一環として取り組む。民間団体が先進的に進める例はあるが、市によると、自治体が主導する形でのホースセラピーは珍しいという。

貝塚市内では昨年8～9月、同市地蔵堂の市有地に、阪南市の社会福祉法人「野のはな」が、障害者の就労支援の受け皿にすることなどを目的に、乗馬クラブを併設したレストラン「森の小径」を開設した。

乗馬クラブには約10頭の馬がおり、屋外馬場に加え、屋内馬場も完備する。天候を気にせずに乗馬を楽しめ、府内を中心に幅広く利用されている。

貝塚市によると、市内には不登校になっている小中学生が70人程度いるという。市は市営の教育支援センター「レインボー教室」を活用し、不登校の児童や生徒の学校復帰に向けた支援にあたっている。昨年11月、レインボー教室の遠足でこの乗馬クラブを訪れたところ、生き生きとした表情を見せる子どもたちが多かったため、新年度から本格的に導入することにした。

ホースセラピーでは、馬に直接、触れることで心が癒やされ、乗馬により筋肉が鍛えられる効果が見込まれる。自分の体より大きい馬と向き合うことで子どもたちが自分に自信をもつ効果も期待できるという。

貝塚市のホースセラピーでは、児童や生徒は餌やりなどの世話や乗馬を体験する。参加は1回あたり6人を想定し、予算では30回分の18万円を確保する考えだ。セラピー参加も学校授業への参加と同じ扱いにする。

市は「参加希望者が増えた場合は、補正予算を組んで回数を増やすなどの対応を考える」としている。（斎藤孔成）

障害者が食べやすい『ソフト食』審査 福島でコンクール 福島民友 2017年02月24日 ソフト食について学ぶ参加者



福島県の県北集団給食研究会は23日までに、福島市の桜の聖母短大で第4回ソフト食コンクールを開いた。参加者がソフト食の調理技術や障害者の食事について学んだ。

ソフト食は、普通の料理をのみ込むのが難しい障害者のために食べやすく加工した料理で、見た目や味を実際の料理に近い形で安全に提供できる。

県北地区などの9施設が、ポテトサラダやいかにんじん、ギョーザなどのソフト食14品を出品。

参加者の投票で特別養護老人ホームさわやかアイリス（福島市）の「たこやき」が優勝した。

地域で働き生きていく 西条に障害者就労店舗オープン 商品管理・接客担う

愛媛新聞 2017年2月24日

障害者の就労支援に取り組むNPO法人「サスケ工房」（愛媛県新居浜市）は23日、西

条市大町の西条紺屋町商店街にインターネットオークションの代行などを行う「ぴか曾」を本格オープンした。障害者が接客や商品管理などを担う。店長の河野奈緒美さん（46）は「地域に貢献し、障害者が夢を持てる明るい職場にしたい」と意気込んでいる。

障害者が接客などを行い、インターネットオークションの代行をする「ぴか曾」

サスケ工房はコンピューター利用設計システム（CAD）を学びながら働く就労継続支援A型事業所を県内外に6カ所開設。障害者が働ける分野をさらに広げようと、1日から「ぴか曾」の开店準備を進めてきた。

店名はスペインの画家パブロ・ピカソから名付けた。約30平方メートルの店内には衣料品やブランドバッグ、プロ野球チームの応援グッズなど約500点の多種多様な商品が並ぶ。



車いすでチェーンソー、障害者が働く姿見学 京都・福知山

京都新聞 2017年2月24日
チェーンソーを使ったまき作りの体験をする参加者たち
(兵庫県丹波市市島町上垣)

障害者の就労支援を行っている事業所の成果発表会「ホーム・カミングディ」が23日、京都府福知山市厚中町のNPO法人みらい学園であった。地域の企業や福祉事業所の関係者ら約80人が、障害者が働く農林業の現場を見学して交流を深めた。

ホーム・カミングディは、府などが工賃向上のアドバイスをしている就労支援事業所の職場を開放し、地域のつながりを広げようと2015年度から開催している。同学園は知的や身体などの障害者12人が利用し、野菜栽培などを行っている。

参加者は、兵庫県丹波市市島町上垣の同学園の農場を見学。まき割り機やチェーンソーでのまき作りを体験し、ネギやシイタケを収穫した。

同学園での交流会では利用者が「就職したい」「いろいろな人とコミュニケーションをしたい」などの思いを發表した。同NPO理事の植村浩平さん（29）は「利用者は働く意欲が高い。地域の方々に取り組みを知ってもらい、雇用が生まれればうれしい」と話した。

【2017年02月24日】



「バッチゲーな魔法のカード」ラップでマイナンバーPR 朝日新聞 2017年2月23日



秋田県湯沢市の藤井延之副市長がラップでマイナンバーをPRする動画の一場面（内閣府提供）

マイナンバーカードはバッチゲーな魔法のカード——。そんなラップが21日、ユーチューブで公開された。歌うのは、総務省から出向している秋田県湯沢市の藤井延之副市長（35）。「MCフジイ」として、市の魅力を盛り込んだラップをネットに投稿している。今回は内閣府の

依頼で、若者向けにマイナンバーをPRするラップをつくった。

「意味もメリットもよくわからん」と問いかける高校生に、先生役の藤井さんが「セキュリティだって頑丈」「バイト・就職、必要書類はこれでバッチグー！」などと答える内容だ。(藤崎麻里)

愛する猫に「マイナンバー」交付 浜松の企業発案

静岡新聞 201年2月20日



本家を模したイメージキャラクター

猫ブームに乗り、マイナンバーカード以上の普及を目指す大槻心平社長＝浜松市中区

愛する猫にも「番号」を一。マイナンバー（個人番号）カードの交付が低迷する中、浜松市中区のベンチャー企業「ポーミー」が愛猫の写真と12桁の番号が記載された「マイナンバー（個猫番号）カード」の交付サービスを「猫の日」の2月22日から始める。猫ブームを受けて、猫を家族と捉える愛猫家の取り込みを狙う。

カードは同社の特設ウェブサイト上で猫の名前や住所、性別、生年月日、特徴などを書き込み、写真を添付して申し込むとカードが郵送される。

カードは同社の特設ウェブサイト上で猫の名前や住所、性別、生年月日、特徴などを書き込み、写真を添付して申し込むとカードが郵送される。

見た目は、マイナンバーカードにそっくりだが、臓器提供意思の欄は「愛情提供意思」、カードの取り扱い注意事項は「猫の取り扱い注意」と猫仕様。マイナンバーのウサギのキャラクターの代わりに、猫のキャラクターも作成した。

2016年2月に創業し、ペットシッターなどの業務を展開する同社の大槻心平社長（32）が昨年のマイナンバーカード交付開始を受けて、「もっとペットとの生活が楽しくなれば」と発案した。

飼い主ごとと使用できるマイページでマイナンバーを入力すると、猫ごとに受診歴などが書き込み、番号を交換すれば飼い主同士の交流もできる。「室内で飼う猫は飼い主同士の交流が少ない」と気付いた大槻社長。「犬の散歩でできるような地域のつながりが生まれれば、災害時や病気の時に助け合う絆ができる」との願いを込めて機能を備えた。

マイページには、猫が迷子になった時に必要な作業リストや迷い猫のポスターが簡単にできる機能も盛り込む。継続的に体重などを書き込んで体調管理ができる育成日記のような機能も計画。犬向けの「マイ“ワン”バーカード」の発行も目指すという。



3Dプリンターで神経再生 京大開発、移植に応用

共同通信 2017年2月23日



バイオ3Dプリンターで神経を再生する作業＝23日午後、京都市の京都大病院

細胞を材料にして立体的な構造物を作ることができる「バイオ3Dプリンター」を利用し、神経を再生する技術を開発したと、京都大病院や佐賀大などのチームが23日、発表した。

事故や病気で末梢神経が損傷され、運動や感覚の機能を失った患者に移植する再生医療に応用するため、人を対象とした治験を2019年度に開始したいという。

チームの池口良輔・京大病院准教授（手外科）によると、末梢神経損傷の治療では一般的に、ふくらはぎの神経の一部を切り取り、移植するなどの方法が取られるが、摘出箇所感覚がなくなったり異常になったりする問題があった。

いじめ「件数多いと評価下がる」を改めた結果... 那覇市の小学校、327件→4338件に

沖縄タイムス 2017年2月23日

2016年度に那覇市の小学校で起きたいじめの認知件数が、17年1月現在で4338件であることが22日、那覇市議会で報告された。前年度の327件から急増しているが、市教育委員会などは15年の文部科学省通知を受け、現場の「認知件数の多さで評価が下がる」といった意識を改めた結果とみる。市教委によると、教諭が「嫌な気持ちになっただけでささいなことでも先生に報告して」と児童生徒に伝え、小さいいじめも見逃さないよう対応を強化。件数の7割以上は解消しているという。

子供の未来に夢を - 編集委員 松岡 智

奈良新聞 2017年2月24日

県の平成29年度当初予算案が発表された。一般会計の総額は前年度比3・5%減で、新規事業も88件減。荒井正吾知事が「端境期」と表現する落ち着いた内容となった。そんな中、少子化対策や子育てなど、県や国の将来を担う子供を取り巻く環境の改善に向けては、継続、新規事業ともに一定の力の入れようがうかがえる。

児童虐待に対しては、県内での死亡事件や法改正を踏まえ、県のこども家庭相談センター(児童相談所など)に、初めて専門職の児童福祉司7人程度を職員として採用予定。「0歳0日」の子供の死を防ぐため、望まない妊娠への相談対応力を高めるなど、全般的な体制整備が図られる。

経済的に恵まれない子供への対応を含む居場所づくりでは、子供に無料、安価で食事を提供する「子ども食堂」の開設、運営への補助を新たに予算化。地域で子供を見守り、支え、育てる活動を支援する。

また、保育所などでの重大事故防止の研修と巡回指導支援員配置や、医療的ケア児の保育受け入れ体制整備を行う市町村への補助も新たに盛り込んだ。

さらに、女性が働きやすい環境づくりの側面を併せ持つ内容ながら、待機児童解消に向け、企業主導型保育事業での利用者負担軽減の補助を全国に先駆けて導入。0歳児を持つ父母への対応や、父親の育児参画推進なども新事業として提示されている。

もっとも、それぞれの予算額は大きいものばかりではない。差し迫った課題への対応としては弱いのではないかと、厳しい見方をする人がいるかもしれない。だが、種をまかぬば花は咲かない。すぐには成否の見えにくい取り組みもあるが、予算額は積極性の中での慎重さと捉えたい。

それら施策の展開の中心は、日常的に互いの顔が見えやすい地域単位となるだろう。地域レベルの子育て支援機能の充実には、以前から地域子育て支援拠点事業がある。平成27年度の厚生労働省の同事業実施状況集計では、県内の活動拠点は71カ所で、0~2歳人口1千人当たり2・21カ所は全国平均をやや超えている。今後は、新たな施策を通して市町村、地域との連携を深め、すそ野を広げることが求められよう。

県の子育て支援担当職員は、予算案での施策を「子供の命を守り、子供たちが将来の夢を描けるためのもの」と語った。理想論を言えば、子供の命の尊さと未来への機会は平等であってほしい。県の取り組みのこれからを、期待を込めつつ注目したい。



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行